《特別寄稿》

水野勝成の軌跡

立石定夫

一、流浪十有五年

水野勝成は、永禄七年七月十五日三河刈屋城主水野忠重の嫡子として生れた。母は都築右京進吉豊の女である。幼名国松、長じて藤十郎、六左衛門と云う。今にのこる勝成の画像をみると、眼は大きくて鋭く、肩巾が厚く頑強にして、膂力にすぐれ男性的な精気に満ち満ちた風貌である。性情の過度にまで烈しかった。

水野家では代々忠と云う諱が多い。祖父は忠政、父は忠重、伯父に忠守、忠近、忠勝、忠分等がいる。しかし彼には忠の名のつく諱は与えられていない。弟は忠胤、忠清、忠直と云う。何故であろう。

彼の初陣は天正七年の遠江高天神城攻めで、その後、甲州黒駒の合戦、尾張本治の戦、同長久手の戦、同蟹江の戦に歴戦して武名が高かった。

にも拘らず、父忠重は勝成と合わず、後継者としては弟の忠種を擬していたと見られる節がある。忠種は後に織田信長の女を娶っている。忠重、勝成の父子の嫌悪感は、やがて憎悪となり、天正十二年忠重の侍臣富永半兵衛を勝成が斬ったことから父忠重に勘当を受け、勝成は浪々の旅に出る。齢二十一才の時である。

勝成は豊臣秀吉に仕え、紀州雑賀攻めに参陣し、翌天正十五年佐々成政に仕え（千石）、成政除封後、小西行長、黒田長政に仕える。長政に属して海路東上の節、船中で辱しめをうけたとして鞆で無断脱隊し、そこから備後、備中をあてなく逍遥する。

勝成の足どりは確かではないが、鞆から熊野の渡辺民部、芦田郡高木の豊田美濃、甲怒郡上下の鉄屋兵三郎らの許に寄遇した後、神石郡来見の吉岡太郎左衛門方に滞在。ここから山野村を経て備中後月郡吉井から成羽に赴き、三村親成をたよる。親成は松山城主元親ら一族滅亡後、毛利に被官、八千石を与えられていた。勝成は十九石の扶持をうけ、小坂信濃守利直と藤井好恒（道斉）の女、お登久との間に長男長吉（後の二代勝俊）を儲ける。

慶長三年、秀吉が死んで戦雲俄かに起こる。勝成は家康の口きゝで父忠重の勘気が解かれる。天正十二年に父の許を離れてから十五年間、勝成の放浪が続いたのである。青春の自ら選んだ流浪の生活であった。

勝成は天正十二年、廿一才のとき、父の許を脱し、五人の大小名達に

仕えつゝも、放浪生活は十五年に及ぶ。此の間に彼の味わった長く重い経験は、豊かな人格形成に役立っている。人間関係の重要性と貴重さを、身を以って知っていた数少ない人であったろう。何れの時代であっても、草創期のたぐい稀な事業は、綿密な人間関係の基礎にあることは、今も昔も変りはない。

二、経世家勝成の登場

元和元（一六一五）年五月、大阪夏の陣、刈屋城主水野日向守勝成は、東軍大和国の先峰大将であった。東軍は、大阪攻めに大和国と河内国の二方面に、兵を分った。

河内国は、井伊直孝、藤堂高虎らであった。大和国には、水野勝成、松重倉政、桑山元晴、堀直寄らの外、兵力の大きい軍団として、本多忠政、松平忠明、伊達政宗、松平忠輝が当って居り、総勢三万五千であった。勝成が僅か三万石刈屋領主と云う小身であり乍ら、大和国方面軍の総指揮官であったことは、徳川譜代の中に指揮能力に勝れ練達な者と云へば、家康の脳裡に、水野日向守と云う名が直ぐに浮かんだのであろう。勝成、時に五十二才。軍事指揮者として有能であった。

此の戦いを終え、同年七月、その戦功に依り大和郡山六万石に転封となる。勝成は不満であった。十五年前の慶長五年、関ケ原の戦のあと、徳川家康の所領は二百五十万石から四百万石に拡張し、最強の地位を固めた。同時に西軍に属した外様大名の八十八名が改易され、その所領二百十六万石が没収され、更に減封五名、没収総高は六百三十二万石に達した。東軍方の諸将はすべて所領を増やした。命によって美濃国曽禰を守り、大垣城攻め労のあった勝成は一切の増禄がなかった。そして今、十五年を経、大坂攻めに軍功あって六万石の沙汰である。

同年八月郡山に入った勝成は、洞泉寺の境内に仮の住居を構えた。近時大名が次々に行うような本城の普請や城下の築営には、手をつけようともしなかった。

元和二年徳川家康が逝った。同五年安芸備後の大守であった福島正則が改易される。七月二十二日、将軍秀忠から伏見に呼出された勝成は、備後七郡、備中一郡一村、十万石領主として加禄転封の命をうけた。残暑が尚きびしく、陽は高かった。勝成五十六才。待つこと久し、経世の日が来たのである。

三、勝成の構想力

元和五年八月四日、士分百十九名を引具し海路納につき、深津に至り神辺の旧城に入り、福島丹波守正澄（城番は弟玄蕃）の屋敷に入った。丹波は福島正則の筆頭家老であったものである。直ちに領内の巡視を行ない、品治郡桜山、沼隈郡蓑島、深津郡常興寺山が候補地として検討され、近世藩府の町として、西と北に芦田川を控えた要害で、そのデルタに城下町として広い地帯が確保出来る丘陵、常興寺山に築城することが決定した。古書に云う。

此ノ地ハ古ハ水タマリニテ　其頃ハ茫々タル芦原ナリシヲ御覧アッテ
此処コソ行末永ク栄フベキ要害ノ地ナリトテ　縄張リハ候御自身遊バ

サレシ也（西備名区）と。

元和六年、勝成は城郭と同時に町の建設に着手した。当時、芦田のデルタは、今日のようではなかった。野上半島と深津高地の両腕に抱かれた湾内は、木之庄、吉津、奈良津に面し、深津の薬師寺あたりも西浜として遠千湾であった。鞆を外港として海上交通を押え、河口を干拓して城下町を建設する。大構想であった。築城と浜と呼ぶ運河、街区をわかち要所に寺院を配置し、侍屋敷七十二町歩、藩用地三十六町、十二町の商家町並み（のち三十町に拡大、七万五千坪）が、次々と完成を観た。干拓は、野上、引野、沼田、手城、多治米、草戸、川口など相次いで実行され、寛文期までに新田開墾が行われて行く。元禄期には、福山城下で家中家族一一、七九七人、町方人数一二、九七九人、計二万五千人弱の人たちの生活が繰りひろげられる。葦の風にそよぐ茫々たる土地は、近世城下町に変貌する。まさしく壮大なドラマの誕生である。

然も近世史上、城下町全体が埋立地に造られたと云うのは、他の都市の例を観ない。

常興寺山の丘陵から眼下に茫莫と拡がる葦の原を俯瞰しながら、一人の男の画いた夢の壮絶さには、驚嘆するのみである。爾来三百六十年、福山の歴史にあって、これ程にスケールの大きい構想力をもった人は、何処にも出ていない。

四、逞しい実践力

此の大きな企画性を貫いた強烈な実践力も見逃すことは出来ない。

例えば、当初勝成は、永徳寺山（八幡社丘陵）と天神山の間を堀り抜き、本庄艮の鼻から水を引き、深津村薬師前に流すことゝした（深津川）が、元和六年五月大雨大洪水によって河川氾濫し、城の石崖は崩れ、頓座した。改めて艮の鼻を塞いで、上流の高崎に取水口をつくり、更に芦田川を草戸に向けて流すべく、艮の鼻から池の洲、野上、五本松までの所謂野上堤防を整備した。僅かに二年余の突貫工事である。城は元和八年八月の完成であった。

（元和）八年、御城並二町架残ラズ成就シ同ジキ九年、御礼ノ為ニ御参勤遊サレシト聞エケル（西備名区）

城も町家も、水道も期を一にしている。現代の土木工学を以てしても、驚くべきエネルギーの噴出である。

また寛永十二年着工した瀬戸池、同十九年着工の春日池、同二十年着工の服部大池の大工事は、生産力の向上をめざした用水池の整備であるが、何れも二年程度で完工している。責任者は神谷治部長次であるが、寛永十六年家督を二代勝俊に譲り乍らも、背後に勝成の強い意図が窺える。今岡（駅家町）の末谷池は、勝成自身、率先現場に於て作業指揮中に島原出陣の報に接する。

創業時の精神の強靱さは、何時の場合でもそうであるが、特に水野藩が福山の草創時にかける形相は、凄烈だったと云ってよい。例えば奉行

神谷治部長次が市村綱木（今の西深津町）で示した気魄には、圧倒される思いである。芦田川の水は、二股で上井手用水と下井手用水に分けられる。井手とは田地に取水する施設である。上井手の水がかりは、本庄、木之庄、吉津、深津、奈良津、三吉、手城、市、引野、吉田の十ケ村をうるおすものであるが、その灌概用水を導くために、神谷は岩盤掘削の工事を監督していた。綱木が高い地区で、岩石固く険しいため、人夫は割ぬきが出来ず、工事至難を訴え中止方を求めた。治部は、「この個所の難事はもとより心得ているが必ず出来る筈である、汝ら今之をやめると云うなら、この場に於て拙者は自刃する」と叫び人夫の割籠弁当を取り上げ太鼓を打って、かゝれと命じ、間もなく堀切らせたと云う。

「此ノ所ノ難シキコトハ、我等モトヨリ心得タリ今コレヲナヤミテ堀切りヲヤメレバ、ワレ生涯遂ゲ候」と叱陀した神谷治部の気力が上井手用水を成就させている。治部の設計技術や施工能力は抜群で、後に出る本庄重政と共に三百年後の福山の骨格を残している。

福山の水道にしても、蓮池の貯水池から幹線を南と東に走らせ、町角に設けた貫洞から池や土管で各家に引かせた。

福山御家中、町場ハ呑水ハ芦田川ヨリ御取成サレ候　御家中　町共ニ小路ノ真中ニ溝川ヲ附　自由ニ水御取成サレ候（領分語伝記）

とある如く、全市に敷設した勾配や構造等の技術は、福山城の縄張り、城下の都市計画などと共に、何時どうして養われたのであろうか。何れにしても、施工の活力と覇気は、目を奪うものがある。精魂をかける、と云うものであったろう。

五、勝成の文化性

勝成は、連歌や和歌を嗜み、俳諧の心得もあって自ら詠吟している。倉光（駅家町）の明泉寺知箭を俳友として連歌した五十句、百句が現存し、命意措辞ともに見るべきものがある。特に慶安四年二代勝俊に勤えた野々口立圃は、草戸記などの名文を残し、福山藩在中に多くの知己門弟を持ち、福山に文学の黎明期をもたらした。「たちそふや濃茶の上の薄露」は彼の五十五才のとき、野遊にさそわれ出て、人々茶をたべたりけるを見て、詠んだ句である。

戦国乱世、大名や武家の嗜好する音曲として能が栄えた。勝成も能を好んだ。島原の乱で、本丸に攻め寄せた水野勢の先登に立つ十四才の初陣、孫勝貞の奪戦ぶりをみて、高らかに八島の一曲を舞った。と云われる。勝成は伏見城内にあった能舞台を拝領し、江戸から御能太夫喜多七太夫父子を招き、中島甚五左衛門に御能奉行を命じ、能入用二千石と云う傾倒ぶりであった。万治年中、能は最も盛事であり、ひろく町人層に普及して行く。

儒学、特に朱子学は、水野藩において儒者中島道允、佐藤直方を生み、山崎闇斉学派が風靡するようになる。勝成が久留米より招いた蛮江紫衣、泉竜寺の鷲翁応叟、三世太白克酔、刈屋から伴った賢忠寺の能山芸禅師など、何れも漢詩文に造詣深く、文藻をもって知られている。

千利休によって完成されるわび茶は、大名たちに広まった。勝成もその愛好者で、茶道衆を抱えている。京の後藤栄乗から金二百枚で購入し

た丸壷茶入、弐人静茶入、染付七文字之茶入、合力之壷、三ケ月壷、美濃茶碗、宗岡茶碗などが水野家什物として、水野記に載っている。

美術工芸の絵画、刀剣、建築、陶芸なども偉れたものを残している。

六、歴史を支える情念

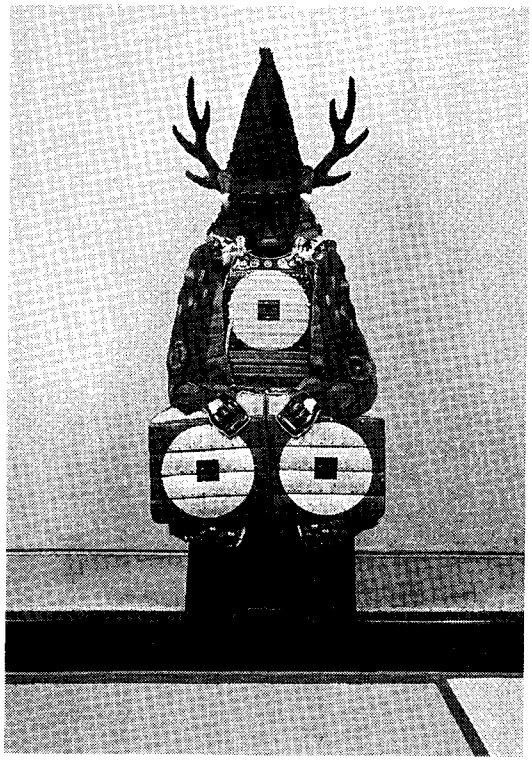
水野藩の由縁の寺は、福山城下に三十四ケ寺ある。勝成の建立した曹洞宗の賢忠寺、同じく臨済宗の弘宗寺、竜渕寺、真言宗の松山寺（廃寺）の外、神辺より移転せしめたのは、曹洞宗の竜興寺、臨済宗の永雲寺、浄土宗の大念寺、真言宗の胎蔵寺である。三河より移転せしめたのは、曹洞宗の泉竜寺、浄土宗の定福寺、日蓮宗の妙政寺、光政寺、真宗の妙蓮寺、寂丹寺、道証寺などであった。勝成が、新たに開拓した土地を福山と名づけ、此の町を生活の場として、永却にわたりより深く整え、長く生命の灯を点じようとしたことがよく判る。

備後には、水野家由縁の社は、十六ある。これらの内、今に傳え宗教活動を行っているのは、神社十五社、寺院三十二ケ寺にのぼっている。神明脈々、法灯連綿として星霜三百年を越えて現存し息づいていることは、庶民の奥深い悲喜の情念である。福山に住んだ人たちの意志の深さ、念力の強さが歴史を貫いていることに感嘆する。此の地に生きた先人たちの情念をしみじみと覚えるのである。

七、勝成にみる人間観

戦国の世に生きた人達の精神の確たる強さと安定さは、戦乱に肉親を失ない、明日の生命のあけくれに生き抜こうとした人達なればこそであったかも知れない。天正三年水野家の統領であった伯父下野守信元、慶長五年には父和泉守忠重を殺害され、慶長十四年には弟の忠胤を自刃せしめねばならなかった人間勝成の悲哀があって、始めて彼の詠んだ「何時の間に身に秘む風の秋にこそ」の句が判ろうと云うものである。

勝成の人間関係を観ると、愛情深くあたゝかい。それは天正七年高天神城攻めの初陣から、寛永十五年島原の乱まで、五十余度の戦いに臨み、



島原の役に着用したと云う勝成の甲冑

人に劣りたることなしと云われた鬼日向の印象からは、別人に見える。

彼の前室は、備中吉井の零落した土豪藤井道斉の女於登久であり、後室は成羽の小領主三村親成の姪の於珊で、権門貴族との閨閥はない。彼の叔母が家康の母於大であり、妹は加藤清正の妻、弟忠胤の妻が織田信長の女であったことなど考えると、勝成の強い婚姻観も判ろうと云うものである。

勝成と家臣団とをめぐる数多くの挿話をみても、寛大に慈、人心の機微を摑んだ見事な統率ぶりである。勝成は備后領主として民政面にも統治能力をもち、草創期の大名に要求される資質は十二分に具えていた。